



宮津港(京都府)

丹後半島の付け根に位置する宮津港は、日本三景の一つ、天橋立(あまのはしだて)を抱える港。付近一帯は特別名勝地、港湾全域が若狭湾国定公園に指定されている自然景観に恵まれた場所だ。ニッケル鉱石の取扱港、遊覧船の発着など観光拠点として機能している。



城下町風情が漂う宮津の街並み

宮津市は宮津湾に面した港町。江戸時代は近畿地方有数の城下町として栄えた地域で、市内中心部には当時をしのばせる風情が残されている。天正8(1580)年、町を流れる大手川付近に、豊臣秀吉から丹後国を与えられた室町將軍家の重臣・細川藤孝が築城。京極高広が藩主となった元和8(1622)年以降、本格的に城下町としての形が整えられてきた。



海岸に沿って広がる砂浜。天橋立には二つの海水浴場があり、夏は海水浴客でにぎわう。

街並みは、城の外堀だったといわれる大手川から西側に広がっており、車1台がようやく通れる道幅の狭い小路が入り組み、木造やモルタルの家々や商店が軒を連ねている。町の南西部に位置する金屋谷町一帯は、宮津藩主の菩提寺だった大頂寺をはじめ十数軒の寺社がある寺町を形成している。建物こそ変わったものの、町のつくり自体は城下町の頃とほとんど変わっていないという。町名も、万町(よろづまち)、新浜町、河原町、袋屋町、魚屋町、漁師町など、かつての地域的特色を彷彿とさせる名称がそのまま使われている。

江戸時代の宮津は藩の年貢米やちりめんの集散地、丹後経済の中心地として発展するとともに、北前船の寄港地としてにぎわった。宮津市歴史資料館にある嘉永5(1852)年頃の万町の再現模型には、宿屋、髪結い、桶屋などが並び、町民が行き交う活気ある様子が展示されている。万町には北前船の船頭なども暮らし、人の集まる風待港であったことから、新浜町には花街ができていたという。

唯一、北前船時代の繁栄を今に伝えるのが、河原町の旧三上家住宅である。元結屋(もったいや)という屋号をもつ三上家は、宮津藩の財政や町政にも深く関わってい





天橋立をはさんで左が阿蘇海、右が宮津湾。なめらかで連続性ある海岸線にするため、砂浜の突堤先端の水面下に扇状の「潜堤」が設けられている。

た宮津城下有数の豪商。糸問屋から始まり、廻船業、酒造業へと手広く事業を展開し、300年にわたり営業を続けていた。「廻船業を営んでいた江戸時代後期が最盛期でした。北前船でもうけた金を酒造業に投資したという点で、商売に対する先見の明があったのだと思います」と施設長の永久徹さんは話す。酒造業は1975年まで続き、『都小町』『大天橋』といった銘柄を生産していたが、現在その家屋は国指定重要文化財として一般公開されている。

400坪の敷地には、築220年の主屋棟、新座敷棟、迎賓施設、釜場酒造蔵がある。中でも贅をつくしているのが迎賓施設だ。庭園に面した書院造りの庭座敷は、床柱に北山杉、床框に黒柿など高価な銘木を用いており、離れにはVIP用の風呂や茶室が設けられている。

西園寺公望、有栖川宮熾仁親王など、幕府や皇族の要人を迎えてきた歴史からも、当時の廻船問屋の裕福さと家格の高さをうかがい知ることができる。



阿蘇海をめぐる観光船が発着する汽船のりば。対岸にある一の宮まで約20分間、天橋立周辺を遊覧できる。(左)

阿蘇海と宮津湾をつなぐ天橋立運河にかかる「回旋橋」。遊覧船や貨物船が航行する際には、橋が回転して船を通す。(右)